『忠度集』の釈教歌について

瀬良基樹

はじめに

平忠度が生きた十二世紀というと、『方丈記』にも述べられているように、天変地異や合戦が続き、人々は世の無常を実感することが多く、心の不安を仏教に帰依することで解消しようとした。和歌の世界でも、俊成・西行・慈円等が法華経二十八品歌を詠んでいるように、法華経を中心に各種の経典に取材した釈教歌が盛んに作られるようになった。

『忠度集』には、法華経を取り上げた釈教歌が四首見られる。ここでは、その特色を明らかにしながら、忠度の和歌観、宗教観を探ってみたいと思う。

一

『忠度集』の釈教歌では、法華経の信解品、提婆品、安楽行品、観音品が取り上げられている。

法華経品の歌よみしなかに、信解品

たらちねときかぬさきよりおほかたはあやしきままでぞなづさひにける　（九五）

提婆品

よそにこそあだとみゆとも千とせまでつかへしなかはへだてしもせず　（九六）

安楽行品

そのたまをむすびこめたるもとゆひもとくべきほどのありけるものを　（九七）

観音品

おりたちてたのむとなればあすかがは淵もせになるものとこそきけ　（九八）

先ず九五番の歌についてみると、歌意は、長者が皆の前で自分の父親だと名乗るのを聞く前から、窮子は大体は自分でも不思議に思われるほど長者を父親だと思ってついていたというもので、家出をして諸国を五十余年間流浪し帰宅した窮子が、長者宅の門外の草庵に止宿して便所掃除をしながら二十年間過ごしていた時

の窮子の心境が詠まれている。

「あやしきまでぞ」の「あやしき」について、『角川古語大辞典』は、

常識で判断しうることの範囲外にある対象に触れて、それに対する不審の気持を中心的に表すが、ある場合にはその対象への畏敬の念を表し、また、ある場合は不都合なものとする意を表すというように、相反する方向の価値意識を伴う。

と解説し、①不可解であるさま。変だと感じさせるようなさま。②霊妙であるさま。神秘的なさま。③異常に優れているさま。④不都合であるさま。けしからぬさま。⑤身分が卑しいさま。みすぼらしいさま。つまらないさま。⑥心もとないさま、などの意味を挙げている。

『忠度集』には、他にも「あやし」の例がある。

立秋

秋きぬとしらできくともおほかたはあやしかるべき風のおとかな　（三一）

この歌は『古今集』の、

いつとてもこひしからずはあらねども秋のゆふべはあやしかりけり　（巻十一、恋歌一、五四六、読人しらず）

を本歌としており、「あやしかる」は①の意味で「不思議なほど心が引かれるさま」を表している。

「あやしきまで」という表現は、和泉式部が、

おなじやうなる人に(1)

人とはばなににかよりとかこたへましあやしきまでもぬるる袖かな　（和泉式部続集、三八九）

と詠んで以来、西行も、

逢友恋昔と云ふ事も

いまよりはむかしがたりはこころせんあやしきまでに袖しをれけり

（山家集、一〇四四。月詣和歌集、八六〇。和歌一字抄、六一七）

と歌い、また慈円も、

故郷郭公

時鳥たかつのみやにくれはどりあやしきまでの声の色かな　（拾玉集、百首句題、三二九〇）

と用いて、当時の流行語だったらしい。

『忠度集』九五番の歌の「あやしき」も①の意味で使われており、「（窮子が）自分でも不思議に感じるさま」の意で使われている。結局「あやしきまで」には、窮子が自分の長者に抱く愛着の深さを発見した驚きが表現されている。

次に「なづさふ」の意味を見てみると、神楽歌の「幣（みてぐら）」に、

幣にならましものをすべ神の御手に取られてなづさはましをなづさはましを

と出てくる。これは『拾遺集』巻十の「神楽歌」にも採られている（五七八）。この歌の「なづさはましを」は、人が神に甘える

ことへの願望、換言すれば、人の神の加護に対する期待を表している。

さらに、『源氏物語』には「なづさふ」は四例出てくる。

(1) 桐壺の更衣亡きあとに、藤壺が入内する。典侍が藤壺が母によく似ているというのを聞き、源氏は藤壺を「若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。」（桐壺）

「なづさひ」は、源氏が藤壺に慣れ親しむ意を表している。源氏の藤壺への憧憬の念は、後の密通事件の起こる伏線ともなっている。

(2) 源氏は、大弐の乳母の病気見舞いに五条の家を訪ねる。乳母は、源氏のような立派な子を養育したことを誇らしく思う。「かたほなるをだに、乳母やうの思ふべき人はあさましうほに見なすものを、ましていと面だたしうなづさひ仕うまつりけん身もいたはしう、かたじけなく思ほゆべかめれば、すずろに涙がちなり。」（夕顔）

「なづさひ」は乳母が源氏に慣れ親しむ意を表す。乳母にとって源氏は、掌中の珠とも言うべき愛しい存在である。

(3) 夕顔の死後、葬送は惟光が執行し、源氏は二条院に帰る。源氏が昨日参内しなかったことを心配する帝の使いとして訪れた頭の中将に、源氏は嘘を交えて弁解する。「乳母にてはべる者の、この五月のころほひより重くわづらひはべりしが、頭剃り忌むこと受けなどして、そのしるしにやよみがへりたりしを、このごろまた起こりて、弱くなんなりにたる、いま一たびとぶらひ見よと申したりしかば、いときなきよりなづさひし者の、いまはのきざみにつらしとや思はんと思うたまへてまかれりしに、その家なりける下人の病しけるが、にはかに出であへで亡くなりにけるを、怖ぢ憚りて、日を暮らしてなむとり出でではべりけるを聞きつけはべりしかば、神事なるころいと不便なることと思ひたまへかしこまりてえ参らぬなり。」（〃）

「なづさひ」は源氏が大弐の乳母に慣れ親しむ意を表わす。源氏のほうでも、頼り甲斐のある乳母とは切っても切れない一体の関係にあったことを表現している。

(4) 須磨退去を決意した源氏は、亡き葵の上の父左大臣の邸を訪れて別れを惜しむ。左大臣は、まず後に残される夕霧の身の上を心配して言う。「幼くものしたまふが、かく齢過ぎぬる中にとまりたまひて、なづさひきこえぬ月日や隔たりたまはむと思ひたまふるをなむ、よろづのことよりも悲しうはべる。」（須磨）

「なづさひ」は、夕霧が父源氏に慣れ親しむ意を表す。左大臣は悲惨な運命に翻弄され親子の絆まで断ち切られようとしている孫の身の上を案じている。

以上の例にも見られるように、『源氏物語』に用いられた「なづさふ」は、親子や乳母と養い君といった身内同士の親愛感を表

わす語であるが、このような素朴な繋絆意識は、社会と繋がりのある事件や死といった個人を圧倒するような運命によって打ち破られていく。

ところで本居宣長は、「なづさふ」の意味について次のように述べている。

河海に、昵近（ナヂミ）なれむつぶ事也と見ゆ、此詞物語文に見えたるは、みな此意也、萬葉にもおほく見えたるを、かの歌どもによみたる意は、いたく異（コト）也　（『源氏物語玉の小櫛』五の巻）[2]

また、『万葉集』の用例について、次のように説明している。

萬葉集に、なづさふといふ言、あまた所に見えたり、昔より此詞をときたる説、みなあたらず、今その歌どもを、あまねく考へ合はするに、或は海川などにうかべること、或は船より渡ることなどにいひ、枕詞にも、引綱の、鳥じもの、にほどりのなどいひて、いづれも〳〵、水に着くことにのみいへり　（『玉かつま』六の巻）[3]

宣長は、『万葉集』の用例は総て水面に浮き漂う意で使われており、平安以降は『河海抄』の言うように「なれむつぶ」、つまり「慣れ親しむ」の意で用いられていることを明らかにしている。

これと同じ意味の用例は、『忠度集』にも一例見られる。

ある所の屏風の絵に、あれたる家に老人花みたるところを人人よみ侍りしに

なづさひしむかしにあらずふりぬるをしらぬおきなと花やみるらん

自分の面影が花を鍾愛していた昔とすっかり変わってしまったことを嘆く老人は、花を擬人化して懐旧の情に浸りながら昔と変わらぬ花との触れ合いを期待している。

「なづさふ」は、『源氏物語』の用例にも見られるように、成人にも幼児にも無関係に用いられて[4]甘えの範疇に属する語であり、現代語の「なつく、なじむ」の意を表している（『日葡辞書』や『小学館日本国語大辞典』は、「なつく」の意味を当てている）。管見では、子が父に「なづさふ」ことは、前述した『源氏物語』須磨の巻の、源氏の須磨隠徙の際に夕霧が源氏を慕うことを述べる左大臣の言葉の中に用いられたのが初出である。忠度の歌の「なづさひ」もこの『源氏物語』の用法に通じるものがあり、窮子が長者になつくの意味で使われている。

次に、忠度歌の意味を信解品の内容と関連させて考えてみよう。信解品には、衆生教化のための七喩の第二の「長者窮子の比喩」が説かれている。その大意は、幼くして家出をした長者の息子の窮子が五十余年間諸国を遍歴して帰宅したが、長者はすぐには父と名乗らず、窮子を門外の草庵に住まわせて便所掃除に従事させること二十年、窮子の心が広大になったことを知り、自分の臨終の時に初めて国王、大臣、親族を集めて彼を実子だと紹介し全財産を付与することを宣言したというもので、窮子が長者の高貴な人格の薫陶を受けて次第に人間的に成長を遂げる様が如実に語ら

れている。忠度の歌は、信解品の、

過是已後　心相体信　入出無難　然其所止　猶在本処

から後、長者が人々の前で自分を窮子の父だと披露する前の部分を受けている。長者は掃除夫として働いている窮子に近づき、自分を父のように思えと告げ汲み取りの仕事をさせる。窮子は次第に長者を信頼するようになるが、依然として自分は使用人だと思い長者が父だとは気づかない。経文の「体信」は、『大漢和辞典』によると、「親しみ信頼する。親信。」の意味で、「なづさふ」は『河海抄』が述べているように、親密にすることが中心となっている。「なづさふ」ことは、相手への信頼が根底にあって生まれる。長者と窮子が親子として再会できたのは、窮子に対する長者の温かい眼差しによるところが大きいが、同時にこの忠度の歌にも見られるように、長者に実父の姿を重ね合わせて一途に慣れ親しんできた窮子の父を求める強い慕情も作用していよう。

ところで、無住は忠度と同じくこの「長者窮子の比喩」の親子の絆を「音訓和歌」に詠んでいる。

別レテ後適相ヒ遇フ　窮子不レ信ゼレ父ヲ
誘引シテ結ブ二労契ヲ一　馴レ始メテ知ル二実ニ父ナルコトヲ一

ナヲザリニ、親子ノ契、ムスビシガ、ナレテ思ヘバ、実ナリケリ。

（『雑談集』、巻十、「法華信解品大意ノ事」）

ここでは『忠度集』の「なづさひ」は「ナレ」と表現され、長者と窮子の「親子ノ契」に、偶然性つまり超越的なものの力に支配される人生の不可思議さを見出している。

このような信解品の父子の出会いをテーマにした歌は、他にも、

年ふれどゆくへもしらぬたらちねよこはいかにしてたづね逢ひけん　（風雅集、巻十八、釈教歌、二〇四七、前参議経盛）

はかなしやおやを親ともしらずしてこはいかにしてたちかへるらむ　（拾玉集、百首和歌、釈教、九三）

などの窮子の数奇な運命を凝視したものがある。

この「長者窮子の比喩」を取り上げた釈教歌は、窮子の人生修行と結びついた「周流五十年」や「止宿草庵」の詞書を持つものが多い。また、『宝物集』には、

教主釈尊も、子をおもふたとへをとり給ふには、三界火宅の中なる諸子をあはれみて、父の長者は三の車をかまへ、五十余年までへる窮子をかなしみて、親の長者は二人の使をつかはすとこそ、法花経の二巻にも侍れ。　（巻六）

と「三車火宅の比喩」と並列されて、親の恩愛の尊さと子の孝養を説く説話として挙げられている。それに対して、子が父の庇護のもとに安心を得ることを詠んだこの忠度の歌は、道元が、

いはゆる「帰依」とは、帰は帰投なり、依は依伏なり。このゆへに帰依といふ。帰投の相は、たとゑば子の父に帰するがごとし。依伏は、たとへば民の王に依するがごとし。いはゆる救済の言なり。仏はこれ大師なるがゆへに帰依す、法は良薬なるが

ゆへに帰依す、僧は勝友なるがゆへに帰依す。
（『正法眼蔵』[5]第六「帰依仏僧宝」）

と述べているように、衆生が仏法僧に「帰依」して安住するいわゆる「三帰」の境地に通じるものであった。

二

次に、『忠度集』九六番の提婆品を取り上げた歌を見てみよう。歌意は、提婆達多はたの者には釈尊にとって仇敵のように見えるけれども、実は提婆達多の前身は前世で釈尊が法華経を得ようとして国王の地位を捨てて千年間も仕えた阿私仙人だったのであり、このような二人の親密な間柄は誰も隔てることができないというもので、忠度は釈尊に反逆して数々の悪事を犯した提婆達多を全くの悪人とは言い切れないと言って好意的に見ている。

提婆達多の悪行については、『梁塵秘抄』に、

釈迦の御法を受けずして、背くと人には見せしかど、千歳の勤めを今日開けば、達多は仏の師なりける　（一一〇）

達多五逆の悪人と、名には負へども真には、釈迦の法華経習ひける、阿私仙人是ぞかし　（一一一）

とあって、提婆達多を釈尊の教えに背き五逆罪を犯した悪人だとしている。桜岡寛氏は、前者について、「下二句は、経文に沿っているが、一首全体の意味は、小乗経や『法華経』の文そのものからは導き出されない経釈にもとづくものである。」と述べ、後者についても、「「五逆」云々は『法華経』に記述がなく、他の経に由来するものである。」と説明されているように、提婆達多の悪行については法華経には具体的な記述がない。

次に、提婆達多を釈尊の「あだ」と見る表現は、『公任集』に、

提婆品

みな人を仏の道にいれつれば仏のあだも仏なりけり（二七〇）

とあり、忠度の歌もこれを本歌としている。提婆達多の前身の阿私仙人が釈尊に法華経を授けたために衆生は皆仏道の悟りの世界に入ることができたので、釈尊の敵の提婆達多も仏と言えると悪人成仏を歌った本歌[7]に対して、忠度の歌は「千とせまでつかへしなか」なので釈尊と提婆達多とは強い師弟の絆で結ばれていると述べて、提婆達多に対する世評に左右されない両者の関係を確認している。「千とせまでつかへし」は、提婆達多品の、

王聞仙言　歓喜踊躍　即随仙人　供給所須　採菓汲水
拾薪設食　乃至以身　而作牀座　身心無倦　于時泰事
経於千歳　為於法故　精勤給侍　令無所乏

を受けている。

なお、『拾玉集』は、

皆因提婆達多

ありしむかしわれみちびきし山人をけふはあだとや人の見るらむ

（詠百首和歌、二四七四）

と、忠度とは逆に、釈尊の感想として衆生が提婆達多を表面的に

見て悪人として捉えているのではないかと述べて、提婆達多に対する一面的な見方しかしない世評を批判している。結局忠度のこの歌は、前述した『梁塵秘抄』の歌謡に内容的に通じている。

三

次に、『忠度集』九七番の安楽行品を詠んだ歌を見てみよう。

この歌は、法華七喩の第六の「髻中明珠の比喩」を取り上げている。歌意は、世界を治める転輪聖王は、普通は戦功を立てた者には様々な恩賞を与えるが、髻の中にあるただ一つの輝く玉を与えることは決してない、そのように釈尊は煩悩と戦う者には種々の方便を用いて法を説くが、法華経の教えだけは真に法を求める者にだけしか理解できないので容易には明かさない、しかし、転輪聖王は時には大功を立てた勇者にはあの髻中の明珠を解いて与えるように、釈尊も臨終にあたりこの世における最後のものとして賢聖達に法華経の教えを説くことのできる時が訪れたのだなあというもので、「そのたま」は世界の土の象徴としての転輪聖王の持つ髻中の明珠を指し、法華経の教えを喩えている。「とく」は「説く」と「解く」の掛詞で「むすびこめ」と対応しており、「べき」は可能の意を表わし「ものを」は強い感動の意を示す終助詞である。

法華経は釈尊の教えの中でも最も重要なもので教えの最後に与えるものとされ、釈尊はそれまで法華経を説いてこなかったが、涅槃に入る直前になって初めて説いたと言われる。この忠度の歌は、釈尊が最後に法華経を最高の教えとして賢聖らに説こうとしている場面を詠んでいる。これは安楽行品の

髻如強力　転輪聖王　欲以威勢　降伏諸国　……
唯髻中明珠　不以与之　……　如転輪王
見諸兵衆　有大功者　心甚歓喜　以此難信之珠　久在髻中
不妄与人　而今与之　如来亦復如是　……　爾時如来
亦大歓喜　此法華経　能令衆生　至一切智　一切世間
多怨難信　先所未説　而今説之　……　始於今日
乃与汝等　而敷演之

に拠っており、またこれは偈にも重ねて述べられている。

この「髻中明珠の比喩」を取り上げた歌は他に次のようなものがある。

市原王歌一首

いなだきにきすめるたまはふたつなしかにもかくにもきみがまにまに　（万葉集、巻三、譬喩歌、四一五）

唯髻中明珠

もとゆひのなかなるのりのたまさかにとかぬかぎりはしる人ぞなき　（続後撰集、巻十、釈教歌、五九四、京極前関白家肥後。和歌口伝、一九五）

久安百首歌に釈教の心を

ふたつなきたまをこめたるもとゆひのとくことかたき法とこそきけ

（玉葉集、巻十九、釈教歌、二六九六、待賢門院堀河。久安百首、一〇九〇。万代和歌集、一六七一。夫木和歌抄、一六二六八）

市原王は自分の娘を、肥後と待賢門院堀河は法華経の教えをそれぞれ秘蔵の貴重なものとして「磐中の明珠」に喩えている。

また、西行の『聞書集』の

深入禅定、見十方仏

ふかき山に心の月しすみぬればかがみによものさとりをぞみる

（法花経廿八品、安楽行品、一五）

や、俊成の『長秋詠藻』の、

深入禅定、見十方仏

しづかなるいほりをしめて入りぬれば一かたならぬ光をぞみる

（釈教歌、安楽行品、四一六）

が、背景の静謐な風景に聖なる宗教的な雰囲気の漂う世界を暗示させて、法華経の説く四安楽行の実践による安らかな悟りの境地への到達を詠んでいるのに対し、忠度の歌は、釈尊の法華経を説く機会に接し得た賢聖達の歓喜を「磐中明珠の比喩」に仮託して歌って、仏徳と法華経を称えているところに特色がある。

四

次に、『忠度集』九八番の観音品を詠んだ歌を見てみよう。この歌は、『風雅集』、巻十八、釈教歌、二〇五八に、「普門品、即得浅処のこころを」の詞書で採られており、また『月詣集』巻十二、釈教、一〇五八に、「観音品の心をよめる」の題で載せられている。歌意は、深い川を渡ろうとして川辺に下り立ち懸命に観世音菩薩の御名を唱えてお祈りすれば、その御利益によってあの古歌に詠まれた明日香川のように瞬時に淵が瀬に変わって容易に対岸に渡れるということだというもので、「おりたちて」は「下り立ちて」と「身を入れて行う、懸命になる」の意の「おりたちて」との掛詞である。

『風雅集』の詞書の「即得浅処」とは、普門品の、

若為大水所漂　称其名号　即得浅処

を指しており、この詞書で詠まれた歌には、

妙音品

しづむべき人をかなしと思ふには淵を瀬になす物にぞ有りける

（続後拾遺集、巻十九、釈教歌、一二八八、堀河右大臣。入道右大臣集、一〇三、詞書「観音」）

若為二大水一所レ漂、称二其名号一即得二浅処一

泊瀬川ながきふちだにあさき瀬となりけるちかひ猶やたのまん

（飛鳥(8)）

（井栄雅七回忌品経和歌、詠二法華普門品一和歌、准三宮歌経）

などがある。前者の詞書は「普門品」の誤りであるが、溺れる人がその名号を唱えることで観世音菩薩の救済がもたらされること

を歌っており、後者は忠度の歌と同じく淵を前にして対岸に渡ることを躊躇している時の観世音菩薩の御利益への期待を詠んでいる。

「淵も瀬になる」という歌語を用いた釈教歌は他にも、

仏の御名をきくもの女の身をかへて男になるといへる事をよめる

かの岸にわたらん物はあすか川さはりのふちやせになりぬらん

（散木奇歌集、釈教、九二五）

一切賢聖皆以無為而有差別

あすか川おなじながれの水も猶淵せはさすがありとこそきけ

（続拾遺集、巻十九、釈教歌、一三六七、法印公誉）

平等性智

あすか川ふち瀬もともにおしなべて同じみかさの水のおもかげ

（安撰和歌集、巻十九、釈教歌上、四二〇、権僧正兼恵）

などがある。

俊頼の歌は、提婆達多品の竜女成仏の話にもあるように、汚れて成仏できないとされる女が男に変成して彼岸に渡ることを、「さはりのふちがせになる」と表現している。公誉の歌の詞書は、『法華玄義』[9]には、

一切智人ハ以テスレドモ二無為法ヲ一而モ有リ二差別一。

とあり、「淵せ」は兼恵の歌と同じく差別を喩えている。

この「淵もせになる」という歌語は、『古今集』の

題しらず

世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる

（巻十八、雑歌下、九三三、読人しらず）

を本歌にしたもので、世の無常や人の心の変化の早さを言う場合などにしばしば用いられた。この忠度の歌の場合も、（前述した堀河右大臣の歌に見られるような普門品の句「即得二浅瀬一」を「淵もせになる」という歌語に直訳的に置き換える釈教歌の伝統を踏まえながら、）「世の衆生がその名を唱える音声を観じて、大慈大悲を垂れ、解脱を得させる」[10]観世音菩薩が水難から人を救う功徳の偉大さを表現している。

なお、「おりたつ」は『後撰集』に先例がある。

ふちせとも心もしらず涙河おりやたつべきそでのぬるるに

（巻十、恋二、六一一、大輔）

この歌の「ふちせ」は、相手への恋情の深さ浅さを喩えている。

終わりに

『忠度集』の四首の釈教歌は、代表的な大乗仏典である法華経の人口に膾炙した経文を取り上げながら、それに独自の解釈を施して歌に詠んでいる。同時に、経文に盛られた人間の生き方や物の考え方に触れて得られた感動を、洗練された歌語、本歌取りや逆説の技法・物語的な趣向等を用いながら作品化し、和歌としてより完成度の高いものを目指している。

各歌はいづれも法華経の各品に説かれた内容に新しい発見をしたことを述べた法華経賛歌であり、法文歌として経典の内容を強く宣布するものとなっている。『忠度集』九五番の歌では親子の純粋な人間愛を取り上げ、九六番の歌では釈尊と一般的には悪人とされる提婆達多との師弟愛を逆説的に称揚し、九七番の歌では賢聖達の法華経との出会いの感激を延べ、九八番の歌では観世音菩薩の現世利益的な功徳を賞賛している。九五番の歌は『宝物集』に語られているような教訓的な内容ではなく、信や愛といった人間の生き方の真実を、物語の世界の一場面のように表現している。また、九六番の歌は『梁塵秘抄』の歌謡と内容が通じるものがあり、広大な釈尊の慈悲、偉大な法華経の功徳に感激する当時の庶民感情がテーマとして取り上げられている。

表現の面でも、「なづさふ」、「もとゆひ」、「あすかがは淵もせになる」などの伝統的な歌語、「あだ」といった抽象的な概念を盛った語などの使用により、格調の高いリズムを生み出している。また、文末の表現も、「ぞ…ける」、「しもせず」、「こそきけ」といった強調法、「ものを」という詠嘆の表現を用いて、雄渾で荘重なリズムを作り出し、形而上的な内容を詠む釈教歌にふさわしいものになっている。

注

(1) 前の三八八の歌の詞書に、「今はたえてあはじなどいひてのちも、またいきあひて」とある。

(2) 『本居宣長全集』第四巻、筑摩書房、昭和四十四年十月。

(3) 『本居宣長全集』第一巻、筑摩書房、平成五年十月。

(4) 「甘ゆ」のこの点について土井健郎氏は、「大盲海の『あまゆ』の項を見ると、『人の情あるにもたれる』とだけあり、そこにあげられている出典の例文はいずれも成人についてのもので、幼児についてのものは一つもない。このことはもしかすると、甘えを特に幼児的なものと考えるわれわれの意識が時代的に新しいものであって、過去においては全くそのことに注意が払われていなかったことを暗示しているのかもしれない。」(『注釈「甘え」の構造』、弘文堂、平成五年九月)と述べられている。

(5) 『日本思想大系』13『道元下』、岩波書店、一九七二年二月。

(6) 『古典文学における天台法門の影響研究』、岩波出版サービスセンター、二〇〇一年五月。

(7) 『小学館日本古典文学全集』第二十五巻の『梁塵秘抄』の歌謡114の説明による。

(8) 『釈教歌詠全集』(東方出版)第三巻による。

(9) 仏教大系『法華玄義』(仏教大系完成会編、大正十年二月)第五。

(10) 『小学館日本国語大辞典』第五巻の「観音」の説明による。

なお、和歌は『新編国歌大観』に、『源氏物語』は『新編日本古典文学全集』に、『宝物集』、『梁塵秘抄』は『新日本古典文学大系』に、『雑談集』は山田昭全・三木紀人編校『中世の文学『雑談集』』(三弥

井哲店、昭和五十一年九月）に、法華経は『岩波文庫本』に拠った。

（せら　もとき　元　高校教諭）

研究室受贈図書雑誌目録Ⅰ　（平成十四年一月～十二月）

《単行本》

漢文古版本とその受容（訓読）（国際ワークショップ）

源氏物語の研究蕊と浮舟、その生（東京女子大学日本文学科）

古代和歌集点描（長友文明・大嶺槃博氏寄贈）

古典籍原本データベースにおけるテキストと絵図の構造的検索の研究（研究代表者　中村康夫（国文学研究資料館研究情報部教授））

『青鞜』と日本女子大学校同窓生（年譜）（日本女子大学大学院文学研究科日本文学専攻内岩淵（倉田）研究室）

造形と日本文学（国文学研究資料館）

土岐武治文庫　和書目録（花園大学国文学科）

名古屋大学日本語学研究室過去・現在・未来（名古屋大学大学院文学研究科）

日本に於ける漢字字体規範成立の実証的研究（北海道大学大学院文学研究科）

《雑　誌》

愛知教育大学大学院国語研究（愛知教育大学大学院国語教育専攻）　十

愛知県立大学文学部論集（愛知県立大学文学部国文学科）　五十

愛知淑徳大学国語国文（愛知淑徳大学国文学会）　二五

愛知大學　國文學（愛知大學國文學會）　四一

愛知文教大学比較文化研究（愛知文教大学国際文化学会）　三

愛知文教大学論叢（愛知文教大学）　四

青山語文（青山学院大学日本文学会）　三二

葭（山崎勝昭）　八

跡見学園女子大学国文学科報（跡見学園女子大学国文学科）　三十

いわき明星文学語学（いわき明星大学日本文学会）　七

宇大国語論究（宇都宮大学国語教育学会）　十三

湖（うみ）の本　エッセイ（桑恒平）　二四、二五、二六

湖（うみ）の本（桑恒平）　四六、四七

歌子（実践女子短期大学日本語コミュニケーション学科）　十

王朝文学研究誌（大阪教育大学大学院王朝文学研究会）　十三

大阪樟蔭女子大学　日本語研究センター報告（大阪樟蔭女子大学日本語研究センター）　十

大阪大学日本学報（大阪大学大学院文学研究科日本学研究室）　二一

大谷女子大国文（大谷女子大学日本語日本文学会）　三二

大妻国文（大妻女子大学国文学会）　三三